ふるさとの民話　（第一話）

『街角のかわそ』

『今では様変わりして、話にもならんが ……、七尾街道に「かわそ」が出たもんだ。』と、白馬のやすたろうじいさまの若い頃の話です。

七尾の町から荷車を引いて帰ってくると、白馬の在所の川どえあたりで、たいてい暗くなる。それを待ちかまえていたように、「かわそ」が出て、悪さをするので困っていた。

今日も、やすけじいさまは、いつもの通り荷車を引いて帰ってくると、荷車の後の方を押さえつけるもんがおった。やすたろうじいさまは、「また、でてきたな。」と思い、「今日こそこらしめてやろう。」と身構えた。そして、前の引き棒を「コトーン」と下げてやった。後ろにぶら下がっていた「かわそ」は、その反動で飛び上がって、道わきの小川へ「ドボン」とはまってしまった。

それから幾日かたったある日、やすけじいさまは、町からの帰り道、細口の霧谷（キリタン）の新酒を飲んで、川どえまでさしかかった。「今日は、酔うとるので、荷馬車を道わきに置いて、近道して帰ろう。」と思った。そして、川にかかる丸太の一本橋を渡ろうとしたが、ふと、「かわそ」のことを思いだした。「かわそ」にイド返しされると思い、やすけじいさまは、用心して一本橋を四つ這いに渡りだした。一本橋の中程まで来ると、やっぱり後ろから川ん中へ「ボチャーン」と突き落とされた。

やすけじいさまは、川からはい上がろうとして、土手に何んべん手をかけても落とされるので、しまいには、大声で助けを求めた。近くのげんさのじいさまが、寝ようとしていたが、川どえの方から「オーイ、オーイ」と呼ぶ声がするので行ってみると、やすけじいさまが、川の中で「チャブ、チャブ」しておった。げんさのじいさまが、「お前さま、そんな所でなんしとるがや。」と言うと、やすけじいさまは、けろっとして、土手へと一んと飛び上がってきて、「ありがとう、お前さまが来てくれなんだら、死ぬとこやった。」と言うた。

げんさのじいさまは、「霧谷の新酒は、水の中でも踊れるほど良い酒かなあ。」と思った。

（徳田の民話研究会会長　山下郁雄）

→